



## 茨城県におけるニラ黒腐菌核病の発生実態

茨城県農業総合センター園芸研究所 あきもと 秋元 たくみ 拓己・おがわら 小河原 たかし 孝司

### はじめに

茨城県の令和2年におけるニラの収穫量は、7,450 tで全国3位（農林水産省作物統計作況調査）である。本県のニラ栽培は、6月下旬に定植し、12月ごろにビニルを被覆して翌年の1月から収穫を行うハウス栽培と、休眠覚醒後の翌年4月ごろから収穫を行う露地栽培があり、どちらも1作2~3年と作期が長いことが特徴である。栽培期間中には、白斑葉枯病やネグニ類といった病害虫が発生するが、これらは農薬による防除が可能である。一方で、本県では土壌病害である黒腐菌核病の被害が近年拡大しており、防除法の確立が求められている。

本病の病原菌は *Sclerotium cepivorum* Berkeley であり、ネギ、タマネギ、ニンニク等のネギ属作物に被害を及ぼす（若井田, 1968）。ニラにおいては、有江ら（1985）により本菌による発病が報告された。ニラにおける本病の被害症状は、葉の黄化や萎れ、分けつ数の減少、株の枯死であり（図-1）、特に分けつ数の減少、株の枯死により、著しい収量低下が生ずる（図-2）。また、本病は

低温によって発病が助長される（CROWE, 2008）。本県では、ネギにおける本菌の防除対策として、耕種的・物理的・化学的防除法を組合せた総合防除法が示されている（小河原ら, 2013）。防除法の確立のためには、発生生態に応じた防除適期を把握する必要があるが、本県にお



図-2 甚発生圃場でのニラ黒腐菌核病の被害株の枯死が目立つ。

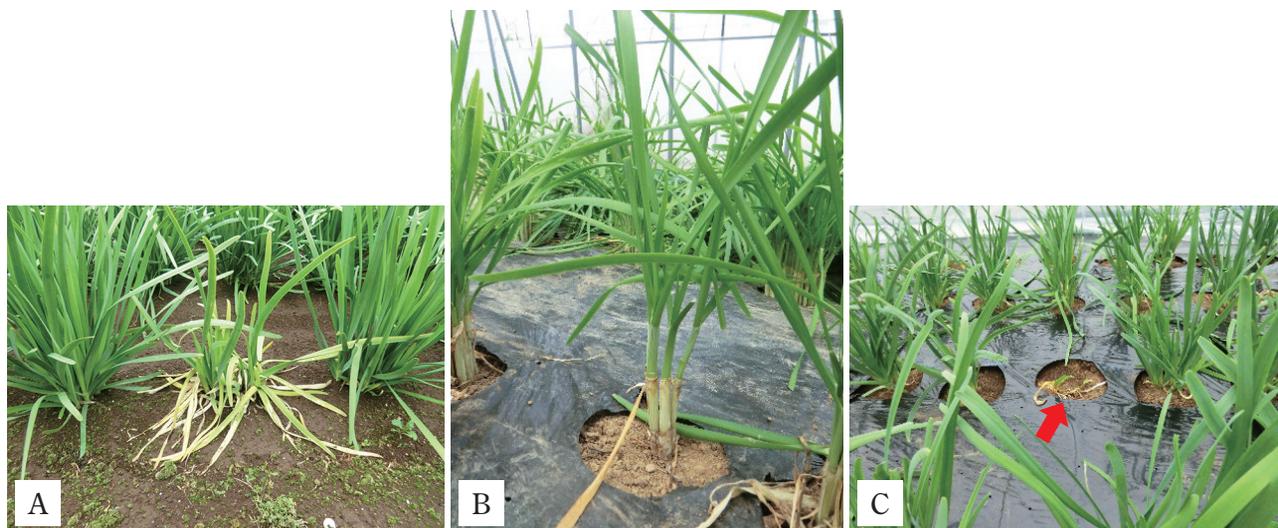


図-1 (A) 葉の黄化や萎れ, (B) 分けつ数の減少, (C) 株の枯死 (矢印)

Actual Occurrence of Chinese Chive White Rot in Ibaraki Prefecture. By Takumi AKIMOTO and Takashi OGAWARA

(キーワード: ニラ, 黒腐菌核病, 発生実態)